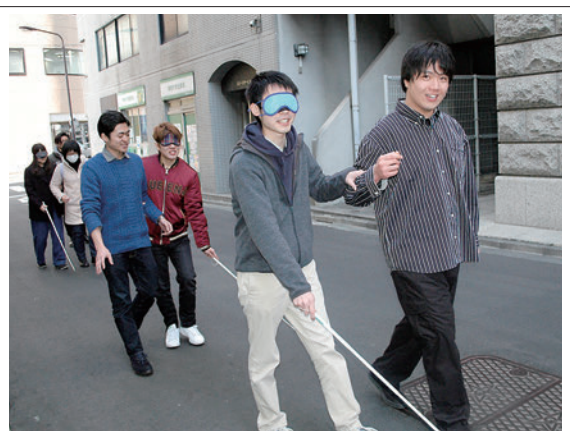
障がい者の歩行を体験

車いす・アイマスク講座 神田キャンパスで初開催

車いすとアイマスクを使って障がい者の歩行を体験する講座が2月26日、神田キャンパスで開催された。車いすの人や視覚障がい者の感覚や行動への理解を深めるとともに、適切な対応ができるようにと学生部が初めて企画、延べ18人の学生が参加した。

指導は東京都千代田区で障がい者のサポートを行っているNPO法人「ホープ」代表の永田潔さん。

当日は、午前に車いす、午後にアイマスクを体験。2人1組で神田キャンパス1号館と周辺を歩き、全員が体験者役と介助者役を行った。車いす体験では、校舎の出入り口にあるスロープや段差がある場所などで実施した。アイマスク体験では、体験者役は白杖を持ち、介助者役は「階段があります」などのアドバイスをしながら歩行した。終了後、アイマスクを外した学生は「路上の歩行は想像以上に恐怖を感じる」と話していた。


介助者とともに白杖を持ってアイマスク体験

車いすを使う方から実体験を聞いた

参加者は、体験の合間に永田さんやNPOのメンバー、障がいを持つ人の話を聞いた。全盲の成瀬千夏さんは「慣れていない土地や駅などで肩をたたかれ、お手伝いましょうかと声をかけられる時は本当にありがたい」と周りの声かけの大切さを訴えた。また電動車いすを使用する上田有紀さんは、日本と海外のバリアフリーの違いを紹介。「米国ではどんな小さな店でも車いす専用の出入り口があり、人々もさりげなくケアしてくれるので車いすを使っていることを忘れることがある。日本もそんな社会になってほしい」と呼びかけた。学生たちから多くの質問が寄せられた。

車いすを体験した中村真さん（二部法3）は「実際に車いすに乗って、目線が低くなったことを感じた。独学で特別支援教育について学んでいるが、映画の音声ガイドの制作もやってみたい。将来の活動へ背中を押してくれた講座内容だった」と語る。

また田尻美樹さん（文1）は「今まで目の不自由な方に会っても何もお手伝いできなかったが、これからは自分から声をかけようと思う」と笑顔で話した。

学生部ではこのほか、手話を学ぶ障がい者支援講座を実施している。

連続出展 情報科学研が成果披露
第10回川崎国際環境技術展

環境分野の優れた技術を発信する展示会「川崎国際環境技術展」（2月1・2日、川崎市中原区とどろきアリーナ）に情報科学研究所（関根純所長）が出展、創エネルギーやアクセシビリティ（利用しやすさ）をテーマに3研究室が展示した。同環境技術展は今年第10回の節目を迎え、最終日に10回連続出展の本学情報科学研究所に、他の15団体とともに川崎市から感謝状が贈呈された。

本学から出展したのは文学部の植村八潮・野口武悟両研究室、ネットワーク情報学部の綿貫理明研究室。

植村研究室の小松幸男さん（文2）と益子大輝さん（文2）は、視覚障がい者が映画のDVDを楽しむ際に使う音声ガイド機能の内容や使いやすさについて調査を進めている。展示ブースでは人気アニメ映画の映像を音声ガイドとともに流して紹介した。小松さん、益子さんは「今後は利用者に聞き取り調査を行い、より使いやすいものができるよう働きかけたい」と話している。

野口研究室の戸澤海智さん（文2）は、LLブックについて紹介。LLブックは、平易な文章で写真、絵、記号を多用し読みやすく編集された本。年代を問わず、障がいのある人、書かれた言語を母語としない人にも理解できるよう工夫されている。

野口研究室では、LLブックの普及に取り組み、出版社の協力でポータルサイトを開設、戸澤さんら学生はLLブックの制作にもチャレンジしており、研究の一端を披露した。

情報技術を環境・エネルギー問題に適用する研究を行う綿貫研究室は2009年から毎年出展してきた。東日本大震災発生の11年、産官学連携で自転車型人力発電機を開発し、同環境展でも話題となった。今回は、人力発電と太陽光発電によるハイブリッド創エネについての研究を展示した。

綿貫教授は「展示会では、社会人の見学のほか小学生の姿も目立った。この世代に大学の研究成果をアピールすることは大切で、川崎国際環境技術展は、良い情報発信の場だ」と話している。

感謝状を手にする植村教授（右から２人目）と綿貫教授（同３人目）

神情協

綿貫教授に感謝状
SE寄付講座発展に尽力

綿貫教授（右）に常山会長から感謝状が手渡された

綿貫理明ネットワーク情報学部教授に一般社団法人神奈川県情報サービス産業協会（神情協、常山勝彦会長）から感謝状が贈呈された。

神情協は、2007年からSE（システムエンジニア）の業務について学ぶ寄付講座をネットワーク情報学部で開講しており、綿貫教授は講座の運営・発展に長年尽力してきた。

同講座は18年度以降も小林隆教授の担当で「システムエンジニア論」として継続される。

授与式は2月14日、横浜市で行われた。綿貫教授は「講座は、本学の教育理念『社会知性の開発』を基本に展開されている。神情協には、こちらから感謝を申し上げたい」と語った。

神情協は加盟団体345社。本学のインターンシップ（就業体験）の実施にも協力している。

平昌冬季オリンピック観戦記

スポーツコンディショニングゼミナール（教養ゼミ、齋藤実経営学部教授）では、本年度「観るスポーツ」をテーマにさまざまなスポーツを観戦してきたが、最も大きなイベントである平昌冬季オリンピックに参加することができた。観戦で学んだことを観るスポーツ、支えるスポーツの視点から報告する。

スポーツコンディショニングゼミの２学生

平昌冬季オリンピック会場で観客を迎えるボランティアスタッフ

河村佳歩（商３）＝写真左
嵯峨根京子（経営３）＝写真右

たたえ合った選手に感動

大会支えたボランティア

初めての五輪観戦で、幸運にも日本代表選手が金メダルを獲得する瞬間に2度も立ち会うことができた。フィギュアスケートの男子とスピードスケート女子500㍍だ。スピード女子500では、前大会優勝の韓国の李相花選手が出場することもあり、韓国の観客がほとんどで、その迫力に圧倒されるほどだった。先に滑った小平奈緒選手がオリンピックレコードを記録し、李選手の記録が小平選手に及ばなかったことが分かると会場は落胆の空気が漂った。

しかし小平・李両選手がお互いをたたえ合いながらリンクを回り始めると、会場全体の空気が一気に変わった。両選手のスポーツマンシップに会場全体が感嘆し、和やかな空気となった。その場面に立ち会えた感動は、かつて経験したことのない特別な時間となった。

平昌でボランティアスタッフは、共通のウエアに身を包み、受付、会場案内、売店などで観客に対する運営のほとんどを担っていた。

渡韓前の日本の報道では、ボランティアスタッフに対する劣悪な待遇が取りざたされていたが、現地に来て、不満を抱えているようには見えなかった。むしろ、どのスタッフも「海外からの客をもてなしたい」と心地よい対応をしてくれた。このオリンピックの成功に、彼らの存在が欠かせないものだったと思う。

さて、日本は2020年の東京五輪・パラリンピックを控えている。今回の平昌五輪での経験をもとに、東京五輪・パラリンピックでは観客ではなくスタッフとしてかかわり、成功へと盛り上げていきたいと強く感じている。